

香川のタウン誌、ランチ、カフェ、
グルメ情報はナイスタウンで！

NICE TOWN



四国デイスカバリ★

～人と人の繋がりを大事に！出版社の新しい地域貢献のカタチ～

今回ご紹介するのは、みなさんおなじみのタウン情報誌「**ナイスタウン**」を
発行する**ナイスタウン出版株式会社**です！

ナイスタウンの吉田直由専務取締役には、今年2月に当局が主催した
地方創生フォーラム¹にご登壇いただき、学生に特化した新感覚の情報発信
基地「With Cafe」の話題を中心に、地域をどう盛り上げるかについて
ご講演いただきました。

今回は、通常、大学生限定の「With Cafe」（香川大学の目の前！）に
特別に入らせていただき、吉田専務、「With Cafe」を運営する株式会社
アップ・パートナーズの大谷悠太取締役（24歳にして取締役！）、女性
編集者の柏木栞副編集長（入社3年目にして編集部の実質キャップ！）にお話を伺ってきました！

● 地域連携・地方創生への思いを教えてください。

（吉田専務）

昨今、地方創生と話題になっていますが、40年前から「地元を盛り上げたい！」との考えでやっています。当社は、人とコミュニケーションをとることが仕事であり、雑誌もそのアウトプットの1ツールだと考えています。

ナイスタウンの仕事を通じて知り合った大谷取締役とともに、昨年10月からは大学生専用カフェ「With Cafe」をオープンしました。40年にわたって地域に重点を置いてきたナイスタウンだからこそ持ちうるローカルコンテンツを、タウン誌とは別の形で発信するという試みが「With Cafe」。カフェを営業することが目的ではなく、カフェという場を通じて、学生と地元企業の繋がりを作れればと思っています。

（大谷取締役）

多くの優秀な学生が就職等を機に地元を離れてしまう現状をどうにかしたいと思っていました。学生と地元企業との接点がありません中、企業の採用活動が解禁されてから初めて就職活動を開始する学生も多く、まずは学生と地元企業とを早い段階から繋げることが必要だと考えました。「With Cafe」を通じて、学生に地元企業を身近なものとして感じてもらい、将来の選択肢の1つとして考えてもらえればと思っています。

● 「With Cafe」に対する企業側や学生側の反応はいかがですか？

（吉田専務）

採用が厳しい地元企業などからは「面白い！」という声もあり、現在約23社に協賛いただいています。「With Cafe」は、就職活動開始より前に企業と学生を繋ぎ、学生に早い段階で地元企業を知ってもらう場。必ずしも即効性がある取組みではありませんが、長期的に効果が出てくると思って取り組んでいます。

（大谷取締役）

現在、「With Cafe」の学生会員数は約1,900人²で、1日に約40～50人の学生が訪れて来ています。

企業・団体情報

名称 ナイスタウン出版株式会社
所在地 香川県高松市栗林町1-12-27
設立 1976年（昭和51年）
代表者 吉田洋子
従業員 18名
資本金 1,200万円
HP <https://www.nicetown.co.jp/>

写真左から吉田専務、大谷取締役、柏木副編集長



¹ 「若手職員による地方創生フォーラム in Kagawa（2018年2月25日）」（http://shikoku.mof.go.jp/chiiki/pageshikokuuhpwakate_00001.html）

² 「With Cafe」専用アプリ（大谷取締役自ら作成）の会員数。学生はアプリを通じて入店し、ドリンク1杯を無料で飲むことができる

サークルの会議の場として利用する団体もあり、学生側に徐々に浸透してきたように思います。以前、香川大学OBでベンチャー企業に勤める社員を招いたイベントを行った際には60人程度の学生に参加いただき、その中には1、2年生も多くいました。まさに学生と企業とを早期に繋げるメディアになれて嬉しいです。

現在の営業時間は11時から19時ですが、今後は夜の時間を使って社会人などを対象に地元を盛り上げる何か面白いことができないかと考えています。

(以下、**女性活躍**をテーマに柏木副編集長に答えていただきました)

● **編集者という仕事はハードなイメージですが、柏木さん以外にも女性社員は活躍されていますか？また、ワークライフバランスはどうですか？**

現在、編集部は全員女性(5名)です！社歴などの上下関係なくフラットに議論し合えるアットホームな雰囲気です。

色々な場所へ出掛けるのが好きなので、休日にイベント等に参加しているとそれが仕事に繋がることが多々あります。そのため、仕事とプライベートの境界線は曖昧ですが、好きなことが仕事に活きるので楽しいです。

● **3年目で副編集長を務められておりますが、プレッシャーや戸惑いはありませんでしたか？**

元々、就職先にナスタウンを選んだ理由が、社員ひとりひとりの挑戦・努力を大切に、1年目でも責任のある仕事を任せてもらえるだろうと感じたからです。実際に、入社1か月後には単独でどんどん取材に行かせてもらっていました(取材先からも貫禄があると評されたり(笑))。内容の濃い、充実した仕事をしてきたためか、入社してまだ3年目ですが、自分の感覚では3年以上の年月が経っているように感じます。現在は後輩の育成にも力を入れています！

● **長年ナスタウンが地元の若者文化を牽引し、盛り上げてきたイメージがありますが、今後の展望を教えてください。**

創刊当初は、若者向けのタウン誌という位置付けでしたが、最近では子育て世代の女性をターゲットとした特集記事も多く取り入れています。内容によっては、社外の子育て世代のライターに執筆を依頼することもあります。

今後も老若男女問わずより一層幅広い年齢層の方々に愛される雑誌を目指し、地元密着に徹した情報発信メディアとして地元を盛り上げていけたらと思います。



<取材後記>

○ 取材中、どの方からも「地元を盛り上げたい」という話をお聞きして、ナスタウン設立当初より掲げられている地方創生の考え方が自然と浸透していることを感じました！私たちもさらに地域のことを知り、一緒に盛り上げていけるように取り組んでいきます！(局 経済調査課 石田一真)

○ 第一線で活躍される同世代の方のお話を伺って、大変刺激になりましたし、とても楽しかったです！人と人との繋がりを生み、大切に作るナスタウンの社風に惹かれました！キラリと光る地域のヒトやモノにスポットライトを当て続けるナスタウン。出版社の枠にとらわれず、地域における新たな役割を模索し、進化している元気な会社です。ラーメン女子特集に出たい！(局 総務課 北村愛里紗)

掲載している情報は、平成30年10月時点のものです。